英国研修

～清修での教育と家庭教育の連携から育まれる生徒像～

白梅学園清修中学校　教諭
道元　香織

白梅学園清修中学校の教育目標は、「自立した気品とフロンティア精神を兼ね備えた、社会の第一線で活躍できる女性を育てる」ことである。その目標を達成すべく教育活動のうち、特色の一つとして取り上げられるのが、海外研修である。これは、6カ年の中高一貫教育の中で、中学2年生での英国、高校1年生でのフランス・アルザス地方を中心とした数カ国で行われる2回の研修を指す。

今回は、英国研修に焦点を当て、その前後を含めた学校と家庭での教育の連携の大切さと、その連携により、将来、社会に出て第一線で活躍できる女性の基盤を築き上げることについて述べる。

本校の英国研修では、ロンドン郊外にある、日本でいうところの全寮制の中高一貫教育を行う学校を利用して行われる、英語の語学授業を含むサマープログラムに参加する。このプログラムには、本校の生徒だけではなく、フランス、ドイツ、イタリア、ロシア、ブラジル、中国、韓国などさまざまな国と地域の同年齢の人々が参加する。授業は全て英語で行われ、買い物などの場面を設定した会話表現の練習だけではなく、他の国から来たクラスメイトとグループになり、自分

たちだけの架空の国を想定し、国旗、お金の単位などを決め、模造紙に書いて発表するという内容まである。授業だけではなく、アクティビティと呼ばれる時間には、イギリスが発祥の地であるフットボールやテニス、また水泳、卓球、ダンス、バスケットボールなど、自分の好きな種目を選んで取り組む。この時間は、授業とは異なる、他国からの仲間と一緒に汗を流して、友情を深めることができる。授業では身構えてしまいがちの英語を使ったコミュニケーションも体を使いながらのコミュニケーションを自然ととれる雰囲気になる。エクスカーションと呼ばれる週2回行われる遠足では、ロンドンの大英博物館を始め、ストーンヘッジやオックスフォード、また、映画『ハリーポッター』の撮影現場になったクライスト・チャーチを含め、写真やテレビの映像でしか見たことがない場所に実際に足を運ぶ。中には、バッキンガム宮殿前で衛兵と写真を撮る生徒もいた。日本にいる中学2年生でこのような経験ができる割合は極めて少ない。このような貴重な機会を最大限に活かすためにも、以下の2点を、本校では研修の目的として挙げている。

1つ目は、英国研修は、自身のコミュニケーション力を試す絶好の機会ととらえ、それを大いに活用することである。清修中学校の英語の授業では、まずは自己表現の大切さを感じ、楽しみながら英語を学ぶ姿勢を養う。入学後の授業で、英語で自己紹介できるようになり、ここから英語に親しむステップを作る。もちろん、授業だけではなく、さまざまな場所が自己表現の場であることをこの段階から意識させる。そのため、授業で習った自己紹介は、放課後にも担当教員以外の教員から発音などを細かく個別にアドバイスをもらい、吹き抜けの校舎には生徒の声が響きわたる。また、自宅でも、家族の方に向けて何度も英語で自己紹介をする。自宅で飼っているペットにもする生徒がいるほどである。練習を重ねるにつれて、言語だけではなく、ジェスチャーや声のトーン、大きさにも工夫を凝らし、個性あるものに変化していく。他にも、授業では教科書の会話部分を実生活に合わせた単語に置き換え、生徒同士で発表をさせる場面を数多く設け、自己表現することへの恥ずかしさを軽減するとともに、自分を知ってもらう楽しさを多く感じさせる工夫をしている。スピーチの題材については、自己紹介だけではなく、小学校の時の様子や、自分の将来について、また、英国研修への意気込みを話題にしたものと多岐にわたり、英国研修で活用できる素材を多く提供している。

そして、2つ目の目的は日本の慣れ親しんだ環境とは異なる場所で、自立した生活をすることである。英国研修では、利用する学校の寮に滞在する。今まで使用した施設は、映画「ハリーポッター」シリーズを彷彿とさせるものであり、まるでフィクションの世界に迷い込んだ感覚を持つ。その施設で、自分のことは自分でする、自主自立の生活をして過ごす。日本はあまり不自由さを感じさせない環境であるが、ここでは、日本と同じようはいかず四苦八苦する姿もあるが、それを自身で解決する過程を体感することで、大きく成長する糧になると考えている。

特にこの2つ目の目的に関しては、決してこの研修中のものだけではなく、それまでの学校生活や家庭生活での指導が大きく関わる。日常、学校での行われる指導と家庭での協力が英国研修に繋がり、どのようなことを身につけているのかをいくつかの例をあげながら説明していく。

まずは、時間を意識することで自ら行動することを実践することである。本校では、授業の開始・終了のチャイムや下校の放送がない。入学当初から時計を見て行動することを意識づけさせ、実践する。始めは、時間通りに自分の行動ができずに悩むこともあるが、そこから自分の行動を見直し、限られた時間でどれだけの行動できるのか、また、そのためにはどれぐらい前から行動しなければいけないのかを考えるようになる。研修に置き換えると、空港への集合時間、遠足へ行った時の自由行動後の集合時間を自分で管理して守れるかどうかということになる。誰かが教えてくれる、何かが知らせてくれる感覚が自分で行うことへの感覚を鈍らせている。研修では、時間の管理についてこちらが感心させられるほど意識し、プログラムのスタッフの方からもお褒めの言葉をいただくほどである。朝食時の食堂の前には、待ち切れずに列を作っているが、本校の生徒が最前部に固まっていたのは、普段の時間への意識の高さを表している。

次に、自分で情報を得ることの大切さである。本校での連絡事項の伝達は学年ごとに掲示板があり、それを各自毎日確認し、メモをすることを徹底させている。そのため、朝のホームルームは連絡事項の伝達の場ではなく、国内外のニュースを取り上げるなど、生徒に思考させる時間としている。各教科の課題や委員会活動の連絡についても、その掲示板を見なければならない。まるで大学のようである。情報を自ら収集する力、そして、それをメモにとることで情報を整理していく力を日頃から養っていく。研修中も、英語で表

記された掲示板で予定の変更やアクティビティの案内が貼りだされる。情報が持ち寄られることを待つような受け身の姿勢では、何もつかめないことが国際レベルで認識できる。学校の延長であることを意識すれば、何も変わったことがないのではあるが、英語で書かれるとさすがに怖気づくこともある。そのようなときも、自分でわからないことをスタッフに熱心に身ぶり手ぶりも交えて伝えようと努力している生徒もいる。単に情報を得るだけではなく、その情報について確かめることも必要であり、その実行力の大切さも国際的な舞台で経験する。

また、中学校課程においては、スチューデントブックと呼ばれるスケジュール帳とメモ帳を合わせたものを各自が持っている。年間・月間スケジュール欄には、在校生とその保護者が閲覧できるウェブサイト（保護者連絡システム）で確認した予定を書き込む。また、デイリースケジュール欄には、授業終了後から就寝までの生活について記入し、担任に提出する。その欄には家での手伝いやその日の振り返りを文章で記入する箇所もある。担任はコメントを記入し返却をし、時にそれをもとに生徒との面談を行う。各生徒の放課後や家庭での様子を把握することで、学校生活での様子とリンクさせながら各生徒の様子を把握し、学校での指導に活用する。この生活面の指導は、英国研修前の指導の基盤となり、この点が、学校での取り組みと家庭での教育の部分が連携していることである。

本校では、下校時間を17時としている。これは、家庭での時間も大切にしてほしいという願いを反映させたものである。手伝いは家庭での役割をあたることになり、家族の一員である自覚を持つきっかけになるからである。また、自分で朝起きることや自ら学習を始める姿勢も重要である。生活の管理は、学校だけではなく、自分の素の生活の部分である家庭であるからこそ、きちんと自分のことは自分でしなければならないという意識を持たなければいけない。日本では便利さゆえに、英国研修で戸惑う生徒が多い場面が、衣類の洗濯である。日本では各家庭に自由に使用できる性能が良い洗濯機があったり、また長期滞在経験が少ないために、手洗いの必要性を感じない。そのため、手洗いで洗濯をすることを知らない生徒が多い。洗濯機を使用したことがある生徒であっても、シミを落としたり、部分汚れを手洗いしたりしたことがないのである。これについては、早い段階からご家庭で経験させる意義をお話して家庭で実行していただいている。このおかげで、生徒の荷物には洗濯紐と洗濯バサミ、ときには今ではほとんど使用されないがプラスチック製の洗濯板が含まれている。便利な生活がどれほどのものであるかは、そうでない環境で生活しないというの

が現状なのかもしれない。

研修中に生徒の様子について聞いてみると、運営してくださっているスタッフから時間を厳守することなどを含め、生徒を褒める言葉のあとに、「ただ…」といわれることがある。それは、「コミュニケーションにおける積極性が足りない。聞かれている表現や伝えたい表現がわからないのであれば、自分たちから『わからない』という意思表明ができないのか。」と言われることが多い。生徒側からすると、学校で習った表現であることはわかっていても、思い出せないまま、次の話題になってしまったり、「わからない」という言葉を言うことでさえためらいや恥じらいを感じ何も言えないようである。日本の美徳文化の一つに、謙虚さ、謙遜がある。決して否定しているわけではないが、日本という枠組みから脱し、世界という舞台では、その文化が誤解を招くことがある。これも、自分で実感しなければわからないことであり、13、14歳でそれに気がつくことができたことは、今後の成長の糧となる。研修後には、学校や家庭で受ける助言によって、相手を尊重し、敬う気持ちを示しながら自身を表現するための行動手段の幅を広げ、社会に出てからより身につけておくべき力を養うことができる。

一人ひとりの英国研修は、研修終了とともに終わりを迎えるわけではない。英国研修での経験をきっかけに、自分の言動の幅を広げようと自ら動き出している生徒もいる。例えば、英国研修で知り合った他国の生徒とメールや手紙でやり取りする。それが発展し、お互いの学校の長期休暇を利用してホームスティをする仲になった生徒もいた。英語だけではなく、他言語を習得しようと、本を読んだり、語学番組を視聴したりする生徒もいた。こういった言動を自らできることも成果の一つである。そして、この研修のおよそ2年後にはEU研修があり、それに向けて準備が始まる。EU研修では、学校生活での自主自立の精神をもう一度、世界の舞台で自身の言動を振り返りながら改善をする機会でもある。

海外での不慣れな環境で自分自身を十代前半で試す機会があることに家族を含めた周りの人々に感謝するとともに、勝ち得たものを帰国後の学校生活や家庭生活の中で活かすことで、自立した生活をし、自ら考え行動できる女性へと成長していくこととなる。